

# 世親作『仏随念広註』和訳研究

——後半部分・大乘特有の念仏観——

藤 仲 孝 司

## はじめに

本稿は、チベット訳に現存する世親の『仏随念経広註』に対する翻訳研究であり、中御門敬教氏との共同作業の成果であるが、分量が多いために、それを前半後半に二分して発表するものである。解題については中御門氏の担当部分を参照されたい。

なお、本稿には付録として、『三宝随念経』に関するおそらく最大の著作であるイエシエーギエルツェン著『三宝の功德を随念する仕方の釈論・牟尼の教えの明らかな灯火』東北 No.6093 Ba 1-61の科文を加えた。

## 和訳研究（承前）

<sup>1)</sup>『聖仏随念経』に「如来」それは、諸々の福德の等流<sup>2)</sup>である。諸善根がムダにならない」

ということなど、仏随念を説くここ『仏随念広註』において、

- 1) かの「世尊」は有情の (D.Ngi.58b2) 利益はどんな因により永久になのかと、
- 2) 身体は何であるかと、
- 3) 何に依っているのかと、
- 4) なすべきことは何であるのかと、

---

1) 以下、無著『仏随念註』に対応する記述はない。『聖仏随念経』(D.mDo-sde, No.279, Ya.55a1ff.)の文言に世親独自の説明がなされている。

2) cf. 中村元『仏教語大辞典』東京書籍、1981年、pp.1005a-b

【等流】①因（本）から果（末）を流出するときに、因果が相似していること。後に現れ出た同類のもの。cf. 『瑜伽師地論』「菩薩地」(『大正藏』30, p.502a)

なお、仏身における等流は、受用身ないしそれに伴う変化身を指示する言葉として用いられる。cf. 長尾 [1987] p.450, ツルティム, 藤仲 [2002] pp.204-206

- 5) 方便は何であるのかと、
- 6) どこに住して、それに執着しないで利益なさるのかと、
- 7) どんな事物に執着なさるのかと、
- 8) 断除は何であるのかと、
- 9) 智慧は何であるのかと、
- 10) 身体はどこに (D.Ngi.58b3) 住して、永久に有情の利益をなさるのか、

という意味は、それらの順序 (go rims) のとおりに [以下に]、二句と、六 [句] と、三 [句] と、四 [句] と、また六 [句] と、三 [句] と、三 [句] と、四 [句] と、四 [句] により示す。

そのうち、「如来」それは、

『聖仏随念経』<sup>3)</sup>に「諸々の福德の等流である (D.Ngi.58b4)。諸善根がムダにならない」

というこの二 [句] によって、どんな因により、永久に有情の利益をなさるのかを示す。二つの因以外によっては、永久に有情の利益をすることはできない。凡夫たちは [諸々の善を行ったとしても、それらは] 諸々の福德の異熟 [果としての果報] を与えてから、完全に尽きることになるからである (D.Ngi.58b5)。声聞と独覚たち [は、有漏、無漏の諸々の善を行う。彼らは無上正覚への発心が無いので、それら] の諸善根は [たとえ無漏のものであっても]、無余蘊 (P.Ngi.73b1) 涅槃の界<sup>4)</sup> (領域) において [灰身滅智となって] 尽きることになるからである。[他方、] 如来の諸々の福德は [すべて無漏のものであるうえに、無上正覚に廻向されているので]、異熟 [果としての果報] を与えてから [もなお] 尽きることがない。なぜなら、かの如来は諸々の福德 (D.Ngi.58b6) の等流であるからである。

すなわち、世尊は [かつて] 菩薩行に住したとき、一切の有情を御覧になり、[自己のための世間の染汚ある] 成熟 (果報) を御覧にならなかったし、<sup>5)</sup> 布施など [の波羅蜜] のあらゆる福德の等流果が生起せんがために、布施もまた殊勝になるし、(D.Ngi.58b7) 「布施が尽きませんように」といって、布施 [の功德] を廻向なさるが、

3) 『聖仏随念経』 D.No.279, Ya.55a1-2

法尊は「福德の大河は、等流にして絶えず。これは善根の源にして、これを吸いて竭せず」などというように流水のイメージを用いて説明しているが、もちろんこれは「等流」という訳語からの「遊び」であって、原語に根拠があるわけではない。

4) cf. 『瑜伽師地論』「撰決択分」菩薩地 (『大正蔵』30, p.747c-749a)

5) 六波羅蜜と福德、智慧の二資糧や果との対応関係と、廻向の必要性については、例えば各々『瑜伽師地論』「菩薩地」自他利品 (『大正蔵』30, p.485b, p.482c-483a) を参照。

〔自己の〕受用（享受）の円満のために廻向なさらない。同じく戒など〔の波羅蜜〕は殊勝になるし、「戒などが尽きませんように」といって、〔戒などの功德を無上正覺へ〕廻向なさるが、〔自己の〕善趣の身体の円満など（D.Ngi.59a1）のために廻向なさらない。

そのように、布施などの福德を廻向することが等流となったので、かの如来は福德が無尽なのである。それによって、永久に有情の利益をなさるように行動する。如来（D.Ngi.59a2）のあらゆる善根は無余蘊涅槃の界においても〔小乗者のように〕尽きることがないので、それゆえに諸善根はムダにならない。

それゆえに、<sup>6)</sup>諸如来の身体は恒常であるというのである。〔彼らが菩薩であったときの〕有為の身体のかつて投じた力によって、（D.Ngi.59a3）努力なく如意宝珠のように、あらんかぎり〔変化身として〕作動するからである。そのようならば、かの如来は、有情の利益を果とするが、「諸善根がムダにならない」という。

〔『聖仏随念経』<sup>7)</sup>に〕「忍耐による莊嚴<sup>8)</sup>、（P.Ngi.74a1）福德の宝蔵の依処<sup>9)</sup>、諸々の随好に（D.Ngi.59a4）よる装飾<sup>10)</sup>、相の開華<sup>11)</sup>、〔有情の活動領域・〕行境に順応すること<sup>12)</sup>、〔有情が〕見れば順応しないことはないこと<sup>13)</sup>」

6) 如来の常住については、〈撰大乘論〉（cf. 長尾 [1987] p.330, p.395）、〈莊嚴経論〉IX「菩提品」v.66を参照。なお〈撰大乘論〉（cf. 長尾 [1987] pp.450-451）には、常住の法身から受用は断絶しないし、変化が示されるから、他の二身も常であるが、それは例えば、世間においていつも安楽であるとかいつも食を施すと言うようなものである、といてきわめて現実的に捉えられている。

また「努力なく如意宝珠のように」という記述については、〈撰大乘論〉（cf. 長尾 [1987] pp.272-273）、〈莊嚴経論〉IX「菩提品」vs.18-21を参照。

「投じた力」について〈撰大乘論〉（cf. 長尾 [1987] p.330）では、「本願の投じた力」とされている。

7) 『聖仏随念経』D.No.279, Ya.55a1-2

法尊もこれらの偈頌は「微妙の色身」に関するものであるとする。これは法身以外の受用身と変化身を区別しない考え方となる。二身説は基本的に中観派の立場ではあり、唯識派の三身説に先行する。この『広註』でも後では三身説が出てくるが、この場所の問題設定としては色身を立てるので十分であるということなのであろう。

8) cf. *Mahāvvyutpatti*, 375 (25), 榊 [1981]

以下に説かれる仏の性質は、*Mahāvvyutpatti*, 351 § XIX. 以下の「諸経の中より拮据せる如来の威徳の名号」に続けて説かれている。そこには「de bzhiñ gshegs pa'i che ba mdo sde las byung ba ming」とあり、同書の和訳本には漢訳として「如来大徳経所出名」とあり、一見「如来大徳経」なるものがあるかのように見える。しかし和訳に「諸経の中より」などとあるように特定の出典があるわけではない。ちなみに、訳註87に出した『聖仏随念経』の末尾の文にも「これらが如来の真実の智慧の大なる功德である」とあり、『聖仏随念経』もそれら典拠の一つとなったということではないかと思われる。

9) cf. *Mahāvvyutpatti*, 376 (26), 榊 [1981]

10) cf. *Mahāvvyutpatti*, 377 (27), 榊 [1981]

11) cf. *Mahāvvyutpatti*, 378 (28), 榊 [1981]

12) cf. *Mahāvvyutpatti*, 379 (29), 榊 [1981]

13) cf. *Mahāvvyutpatti*, 380 (30), 榊 [1981]

というこの六句によって、かの世尊はどんな身体によって有情の利益をなさるかの身体それを示す。その身体は色身である。その色身の (D.Ngi.59a5) 円満についても、五種類によって示す。[すなわち、]

- 1) 根本の因の円満と、
- 2) 顕示<sup>14)</sup>の因の円満と、
- 3) 自性の円満と、
- 4) 状態 (分位) の円満と、
- 5) 行い (mdzad pa. 所作) の円満である。

そのうち、「忍耐による莊嚴」ということ、この [句] によって、「根本の因の (D.Ngi.59a6) 円満」を示す。忍は美しさの因である。すなわち、「忍によって美しくなる」<sup>15)</sup>とお説きになった。あるいは、「これは悪い顔色<sup>16)</sup>になる道である。すなわち怒りである。恨みを持つことである」とお説きになった。「忍」とは、[忍] 自体に依止することと、その [忍の] (D.Ngi.59a7) 所対治分 (怒り、恨み) を断ったことによって、美しさの因だと説明した。

『聖仏随念經』に「福德の宝蔵の依処」

ということ、この [句] によって、「顕示の因の円満」を示す。身体の支分個々の因を顕示する因である。

それもまた、〈聖無尽意所説經〉<sup>17)</sup>に (D.Ngi.59b1) 精進の無尽を説いたなかに、福

14) cf. Edward Conze [1974] p.33

asamskṛtaprabhāvitā hy ārya-pudgalāḥ. (聖者たちは無為によって顕し出される)  
鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜經』「一切賢聖、皆以無為法、而有差別」

15) cf. 『律本事 *Dul ba'i gzhi*』 D.No.1, Ga.129a

出典について法尊は単に「經言」としている。

cf. Sylvain Lévi [1907] p.99 kṣāntiā paricārasampat / tathā hi tad āsevanād āyatyād bahujanasupriyo bhavati /

(忍耐による眷属の成就。すなわち、それに専心することから、未来に多くの人に喜ばれる。) cf. ツルティム、藤仲 [2002] pp.64-65 また〈宝徳藏般若經〉第30章「常啼」には、「忍に住する者の身体は全く清浄になる」と説き、その直後に色身三十二相、八十随好相が言及されている。ただし〈八千頌般若經〉には直接の対応は確認できない。恐らくは、〈二万五千頌般若經〉〈十万頌般若經〉等に関係する箇所があると思われる。cf. ツルティム、藤仲 [2007] P.131

16) あるいは「悪しき種族」と翻訳できるかもしれない。

17) cf. 智嚴共宝雲訳「無尽意菩薩品」(『大正藏』13, No.397-12, p.192c23, Braarvig [1993])

テキスト (cf. Braarvig [1993]) は Volume I, pp.47-48; 英訳と研究 Volume II, pp.167-168 を参照。Volume II, p.liii に『仏随念広註』への引用が指摘されている。

〈無尽意所説經〉には世親作とされる『註釈』(D.No.3994, mDo-'grel, Ci) があり、Volume II の英訳部分に詳しく参照されている。

その『註釈』の著者問題は、Volume II, p.cxxvii 以下に検討されている。そこにおいては、チベットの伝承では世親は〈無尽意所説經〉を聞いて大乘に転向したとされるほど『同経』は彼にとって重要なものとされているが、この『註釈』には〈莊嚴論〉〈唯識三十論釈〉

徳の資糧が無尽であることを説いたものから、了解すべきである。

<sup>18)</sup>そこには、一切有情の福德の蘊の十倍によって、如来の一毛孔が現成することを説きになって、毛孔すべてが (D.Ngi.59b2) 現成するのに関連した<sup>19)</sup>福德の蘊の百倍 (P.Ngi.4b1) によって、[八十の随好のうち] 一つの随好が現成する。随好すべてが現成するのに関連した福德の蘊の千倍によって、[三十二相のうち] 眉間の白毫と、肉髻と、法螺 [との三つの相] を除いた (D.Ngi.59b3) [二十九の] 相各々が成就することをお説きになって、二十九の相が成就するのに関連した福德の蘊の一万倍によって、眉間の白毫 [の相一つ] が成就する。眉間の白毫が成就するのに関連した福德の蘊の十万倍によって、頂髻 [の相一つ] が成就する。頂髻が成就するのに関連した福德の蘊の十万百万倍によって、如来の法螺が現成する、とお説きになった。そのようならば、如来のこの色身は「福德の宝蔵の依処」である。

「諸々の随好による装飾」, 「相の (D.Ngi.59b5) 開華」というこの二 [句] によって、色身の自性の円満を示す。如来の美しい身体それ自体は、相と随好によって飾られているのである。

〈五蘊論釈〉〈アビダルマ集論釈〉などが引用されており、世親の真作とは言えないとされる。さらに、この『註釈』の末尾には「〈無尽意所説経〉の次第に諸々の無尽の本体を設定することは、〈瑜伽師地論〉に説かれた。そこを見るべきである」というように、唯識瑜伽行派ときわめて密接な関係を有する著作であるが、多くの先行作品をまとめていく作風などから、安慧など後の唯識瑜伽行派の人による著作であったものが、祖師世親の業績として献呈されたものではないか、と推測されている。

18) 相好については岡田 [1989] [1991a] [1991b] [1992] [1996] を参照。

cf. 『瑜伽師地論』「菩薩地」(『大正蔵』30, p.566c-568c, イェシエーギェルツェン (17b4) には〈現觀莊嚴論〉VIII 18-20 を引用してから、「これらを詳細に知りたいと欲するなら、〈賢劫経〉と「菩薩地」(建立品, 『大正蔵』30, p.566c-568c) と〈宝性論の本偈・註釈〉と〈宝鬘〉より知るべきである。」という。〈賢劫経〉と〈宝鬘〉は上の岡田論文や梶山、瓜生津 [1991] pp.264-269 を参照。『菩薩地』は建立品 (『大正蔵』30, p.566c-568c, 〈宝性論の本偈・註釈〉は高崎 [1989] pp.168-174 を参照。

さらに 18a-20a には、妙相三十二と随好八十による莊嚴の詳細を、〈現觀莊嚴論〉VIII より提示している。そして 20a-b に、「そのように妙相これらを知ってから、たびたび意の対境としたなら、仏陀を随念することを離れないのと、資糧を積むのと障礙を浄める田として仏陀の身体の形相が明瞭に浮かぶし、随念する仏陀の身体このようなものを私もまた得たならいいなと思って菩提心が速やかに生ずるなど、必要性はきわめて大きいのである。」という。

そして相好を観想する意味について、24a には、「これらのあり方について、知恵を持った人たちは、詳細に伺察してから正理の道より導いた決定を得ることが生じたなら、仏陀の功德を随念する無上の仕方です。教主について知ってから、「信を得た」というものの数に入ることになるのです。知ってから信を得たこれについては、『アビダルマ俱舍論』(※) に諦を見たものについて説明するなど、説明の仕方は多種多様に現れているとしても、ここには、初業者の場合に量により導いた殊勝な決定知を得てから、帰依処に対して意が他に変わらないものを、いうのである。」という。

※) 『同註釈』(D.No.4090, 40b) 第6章「賢聖品」の末尾の記述かと思われる。cf. 櫻部、小谷 [1999] pp.445-450

19) rtogs pa とあるが、直後の同様な文章に gtogs pa とあることから、gtogs pa と読んだ。

そのうち、<sup>20)</sup>「諸々の随好による装飾」は、それらは[妙]相の附随物であるからである(D.Ngi.59b6)。「相の開華」は、それらが装飾となったからである。

「[有情の]行境に順応する」という、この[句]によって、「状態の円満<sup>21)</sup>」を示す。[行かれることと]来られることすべてにおいて美しいから、[行住坐臥の]行儀すべてにおいて美しいことが、「状態の円満」(D.Ngi.59b7)である。

「[有情が]見れば順応しないことはない」という、この[句]によって、「行い」<sup>22)</sup>を示す。如来の身体の行いは、それ自体によっても、浄信を生じさせて、[身体の一時の]状態によっても浄信を生じさせるので、(P.Ngi.5a1)有情たちと順応しないことがないのである。(D.Ngi.60a1)[有情は眼により如来の身体を]<sup>23)</sup>見るだけで、「これは偉大な人である」というように証得し、浄信を生じさせること—このことが、これを見れば順応しないことはないことである。

『聖仏随念經』<sup>24)</sup>に「信仰によって信解(mos pa)する者たちは歓喜する<sup>25)</sup>。智慧(shes rab)は圧倒されることがない<sup>26)</sup>。諸力において屈服されることがない<sup>27)</sup>」

(D.Ngi.60a2)というこの三句によって、かの世尊はどんな有情たちに依って有情の利益をなさるのかそれを、示す。彼ら有情も[世尊に対して]信仰(dad pa)の思惟(意楽)、あるいは圧倒された思惟[、すなわちそれら]二つの思惟によって如来のもとに来る。

(D.Ngi.60a3)信仰の思惟もまた二種類[である]。[すなわち、仏について]「どのようなものか」という思惟、または歓喜の思惟である。その両者はまた願楽(mngon par'dod pa)の本体であるから、「信仰」という。

このように、ある者は[仏について]「どのようなものか」という思惟が生じたことと、かつての善根によって(D.Ngi.60a4)正しく促されて、如来のもとに行く。ある者は、[仏の]偉大な功德の本体を聞いてから浄信を正しく生じたことと、善根によって促されて行く。それゆえに、これによって[仏に対して]中立である者と、信

20) イエシエーギェルツェン(21b1-)に、妙相の眷属としての八十随好については、「これらの設定を詳細に知りたいたく欲するなら、『菩薩地』と『現觀莊嚴論』の註釈である』〈二万五千頌〉の光明」と〈三仏母滅害〉と〈註釈・明義〉と、それらすべての意趣を整理してから良く説明する[ツォンカバ著]『善積金鬘』より、知るべきである。」という。

21) 法尊は「分位円満」と翻訳し、仏は行住坐臥、動靜語黙すべての意義において最も端嚴であるとしている。

22) 法尊は「所作円満」と翻訳し、その具体的内容として、仏身の起こす一切の動作は、手を垂らす、眉を揚げる、顧視(かえりみ)る、嚙咳するなどを、挙げている。

23) cf. 〈撰大乘論〉長尾[1987] p.366, 『莊嚴經論』「行住品」XX-XX I 1 49

24) D.mDo-sde, No.279, Ya 55a2-3

25) cf. *Mahāvīyutpatti*, 381 (31), 榊[1981]

26) cf. *Mahāvīyutpatti*, 382 (32), 榊[1981]

27) cf. *Mahāvīyutpatti*, 383 (33), 榊[1981]

仰する者たち<sup>28)</sup>を示したのである。それらによって、(D.Ngi.60a5) 見れば喜ぶことと、浄信を生ずるようなさるから、かの世尊は、信仰によって信解することその二種類ともの歡喜の因である。

圧倒された〔・覆われた〕思惟もまた二種類〔である〕。〔すなわち〕、智慧が圧倒された思惟は、例えば、争論を希求する (D.Ngi.60a6) [ジャイナ教徒の] サッチャカ (bDen pa po)<sup>29)</sup> などのようなものである。身体の力によって圧倒された思惟それは (P.Ngi.75b1), 例えばアータヴァカ [ヤクシャ]<sup>30)</sup> (Skt. Āṭavakayaksa, Tib. gNod sbyin 'brog gnas) などの力によって増上慢をなす者たちのようなものである。それゆえに、これによって、二種類の思惟により〔仏に対して〕諸々の憎悪する者たちを正しく示したのである。

かの世尊 (D.Ngi.60a7) は、究竟した智慧を具えているから、そして、圧倒する究竟した事業を具えているから、圧倒したいと欲する者は、その両者の智慧によって圧倒しないし、<sup>31)</sup> 諸力によって屈服させることがないのである。

[[『聖仏随念經』<sup>32)</sup>に]「一切有情の教主<sup>33)</sup>。諸菩薩 (D.Ngi.60b1) の父<sup>34)</sup>。聖人たちの王<sup>35)</sup>。涅槃の城に行く者たちの隊主<sup>36)</sup>。』

というこの四句によって、かの世尊は、一切有情のなすべきことをなされることを、示す。そのうち、「一切有情の (D.Ngi.60b2) 教主」ということは、かの世尊は差別なく一切有情のなすべきことを、教示することにより、なさるのである。

すなわち、<sup>37)</sup> 悪趣に生まれたある者も、光明と、如来の身を正しく示したことによ

28) これら中立の者と信仰する者と、後に出てくる憎悪する者を含めた様々な人たちを、各々どのように教化するのかということに関しては、例えば『瑜伽師地論』『菩薩地』撰事品 (『大正蔵』30, p.531b), 同「撰異門分」(『大正蔵』30, p.767a) を参照。

29) 釈尊に論争をしかけに行ったジャイナ教徒の「サッチャカ (Saccaka)」と思われる。  
cf. 『中部經典1』(『南伝大蔵經』9, pp.394-437)

30) 居場所について釈尊に争いをしかけた夜叉の「アータヴァカ (Āṭavaka)」と思われる。  
cf. 『相應部經典1』(『南伝大蔵經』12, pp.372-374), 『小部經典2』(『南伝大蔵經』24, pp.65-70)

31) イエシェーギェルツェン (23a) に、「一般的に力については、『普賢行の經』と『三昧王經』など多くの『經』に力の設定が多く説かれているし、特にこの場合の力は軌範師世親はおもに身体の力だと説明しているし、軌範師マンジュシュリーキールティは『三昧王經の註』D.No.4010, Nyi に「智の力として説明しています。」という。身体の力については、共通の教化対象者の現れと合わせて示されたものとしては、ラリタヴィスタラを引用する。智慧の力については「菩薩地」建立品の如来の十力に言及している (『大正蔵』30, p.569a)。なお言及された〈行願讃〉は vs.36-37 を指すものと思われる。

32) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a3

33) cf. *Mahāvīyutpatti*, 384 (34), 榊 [1981]

34) cf. *Mahāvīyutpatti*, 385 (35), 榊 [1981]

35) cf. *Mahāvīyutpatti*, 386 (36), 榊 [1981]

36) cf. *Mahāvīyutpatti*, 387 (37), 榊 [1981]

37) 〈莊嚴經論〉「神通品」Ⅶ 5, 「菩提品」Ⅸ 8

り、浄信を生じてから、善趣に立たされるし、善趣 (D.Ngi.60b3) に生まれた者たち [のうちに] もまた、福分を具えていないある者は、前に説明した方法において、压倒された思惟によって、すぐれたものたちを、輪廻の [十] 善道、布施などに立たせる。福分を具えた者は、二種類の思惟によってすぐれた者たち [のうちに] 善根を (D.Ngi.60b4) [いまだに] 生じさせてない者たちは、善根を生じさせなざる。[すでに] 善根を生じさせた者たちは、善根を成熟するようなざる。[すでに] 成熟した者たちは、種姓どおりに声聞 (P.Ngi.76a1) など [の地] に立たせて、解脱するようなざる。

そのようならば、かの世尊は、悪趣と (D.Ngi.60b5) 善趣に生まれた者たちと、福分を具えた者と、福分を具えていない者たちの [各々] なすべきことを成就するから、「一切有情の教主」という。

そのなすべきことの境位の区別は二種類 [である]。[すなわち、<sup>38)</sup>種姓に住する者のうち、出離のために道に、すでに] 発趣した者 (zhugs pa) の境位の区別と、[これから] 発趣する者 ('jug pa) の境位 (D.Ngi.60b6) の区別である。

発趣した者の境位の区別も、仏が出現するのと、近く成就せんがために、仏と声聞の種姓の区別が二種類ある。そのうち、仏の種姓を具えた者に関して、「諸菩薩の父」ということを語った。

かの世尊 (D.Ngi.60b7) は、自らの功德の円満について自在を得た諸菩薩に対して正しく委嘱するから、転輪王が [次代の王としてすべて] 相が具わった転輪王の [最高の] 子に対して、[その象徴となる七宝のうち、第一の] 輪 [宝] を正しく委嘱する [というところの] 知者たちの父に等しい、彼らの父なるもの、というのである。

(D.Ngi.61a1) 声聞の種姓をもった者たちに関しては、「聖人たちの王」ということを語った。かの世尊は、転輪王の [それ以外の] ふつうの子たち [にとつて] の王となったもののように、声聞にはひとえに御言葉<sup>39)</sup>のとおりにするから、証得<sup>40)</sup>を得た者 [である聖人] たちの王 (D.Ngi.61a2) のようなものになったのである。

発趣する者の境位の区別は、[声聞・独覚・仏の] 三つの種姓すべてにありうるので、それゆえに、それに関して、「涅槃の城に行く者たちの隊主」<sup>41)</sup>ということ語った。かの世尊は、涅槃の [都] 城に発趣する者 [であり、] (D.Ngi.61a3) [なおかつ、

38) これは各々の種姓の有無が議論された後、その種姓に住する者がその道に発趣するのか、あるいはすでに発趣したのかをいう。cf. 『瑜伽師地論』「声聞地」(『大正蔵』30, p.399bff.)

39) D.dka' bzhin du (困難などおりに) とあるが、P.bka' bzhin du を採る。

40) D.rtog pa (分別) であるが、P.rtog pa を採る。

41) 『妙法蓮華経』化城喻品第七 (『大正蔵』9, No.262) の例えを参照。



いまだに<sup>42)</sup>解脱の種子が生じていない (P.Ngi.76b1) 彼ら [を, そ] の種姓どおりに道から他の道へ導かれるから, 「隊主」という。

〔『聖仏随念経』<sup>43)</sup>に〕「智慧が無量である<sup>44)</sup>。辯才が不可思議である<sup>45)</sup>。言葉が清浄である<sup>46)</sup>。音声が美妙である<sup>47)</sup>。容姿を見ることによって満足を知らない (飽き足らない)<sup>48)</sup>。(D.Ngi.61a4) 身体は無比である<sup>49)</sup>」

というこの六句によって, かの世尊はどんな方便によって有情の利益をなさるかの方便を示す。

その方便もまた, かの [如来の身語意の] 三つの業である。そのうち, 順次, 一句によって意の事業を示す。三 [の句] によって語の事業 (D.Ngi.61a5) を示す。二 [の句] によって身の事業を示す。

諸々の語 [の事業] と身の事業は, 法を説くことなどを示す本体であるから, ひたむきに<sup>50)</sup> 有情の利益をなされる方便であることを示す。意の事業もまた, それら [語や身の事業にとって] の動機により有情の (D.Ngi.61a6) 利益をなされる方便であることを, 捉えている。智慧はそれと俱に行じるから, ここには意の事業と説明した。

[その智慧の] 対境は無量であるから, 智慧は無量であり, それを具えているから, 世尊は智慧が無量であるという。身と語の (D.Ngi.61a7) 事業の自相 (定義) は, 有情の利益をなさる方便であると捉えている。それらもまた无量であって, 世尊の智慧それは障礙なく作用する。

語の事業は, 清浄な辯才と音声の功德の円満の特徴を示した。

そのうち, 辯才の (D.Ngi.61b1) 特徴もまた二種類 [である。すなわち], 文字に依るものと, 意味に依るものである<sup>51)</sup>。文字に依るものは, 各句に依って文字の特定

42) 本性善なる種子がある上に, 後の善法の修習により界が増長していくことになる。  
cf. 『瑜伽師地論』「菩薩地」成熟品 (『大正藏』30, p.497a) また, 煩惱障の断により得られる解脱身は, 仏陀と声聞に共通するものとされている (cf. 『唯識三十論』v.30)

43) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a3-4

44) cf. *Mahāvīyutpatti*, 388 (38), 榊 [1981]

45) cf. *Mahāvīyutpatti*, 389 (39), 榊 [1981]

46) cf. *Mahāvīyutpatti*, 300 (40), 榊 [1981]

47) cf. *Mahāvīyutpatti*, 391 (41), 榊 [1981]

48) cf. *Mahāvīyutpatti*, 392 (42), 榊 [1981]

49) cf. *Mahāvīyutpatti*, 393 (43), 榊 [1981]

50) D.ltur であるが, P.lhur を採る。

51) 四無礙解のうち, 義無礙解, 詞無礙解の説明に基づくもののように思われるが, ここでは簡単に所詮と能詮との二つにまとめられている。

cf. 〈俱舍論〉Ⅶ vs.37-38, 『瑜伽師地論』「菩薩地」(『大正藏』30, 「菩提分品」p.539b, 「住品」p.561b-c, 伊原照蓮「四無礙解について」(『梶芳光運博士古稀記念論文集 仏教と哲学』) p.9ff., 勝部 [1979] p.116ff.

のものを、(P.Ngi.77a1) それぞれ他のものによって、無量劫にわたって説いても、如来の辯才は窮尽することがないことから、知るべきである。

意味 (D.Ngi.61b2) に依るものは、無量劫にわたって無量の有情たちが個々に無量の問いを請うたあらゆる問いに対して、[如来は] 一回、一つのお言葉を述べただけで解答することから、知るべきである<sup>52)</sup>。

そのようならば、文字と意味に依った辯才の特徴によって、不可思議で (D.Ngi.61b3) 甚異稀有な法を説かれるから、かの世尊は「辯才が不可思議である」という。

<sup>53)</sup> 言葉の過失 一嘘を語ること (妄語) などと、語るのを焦る過失<sup>54)</sup> 一毛の逆立つこと (Skt. romaharṣa, Tib. spu zing zhes byeng pa) などと、叫ぶ過失 一不快な声調など、それら (D.Ngi.61b4) あらゆるものがないから、かの世尊は「お言葉が清浄である」という。語の功德の門から快いから、かの世尊は「音声が美好である」という。語の功德は、語は音声の<sup>55)</sup> 五支分を具えたものと、六十支分を具えたものから、知る (D.Ngi.61b5) べきである。

[[『聖仏随念經』<sup>56)</sup> に]「容姿を見ることによって満足を知らない (飽き足らない)。身体は無比である。]

というこの二句は、身体の実業の「依処の特徴」と、「自らの本体の特徴」を示した。

そのうち、「依処 [すなわち身体そのもの] の特徴」は「容姿を見ることによって満足を知らないこと (飽き足らないこと)」から知るべきである。かの世尊の「身体

52) いわゆる「一音説法」である。詳しくは参考資料に挙げた石上和敬氏の論文を参照。

cf. 鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』(『大正蔵』14, p.538a)

イエシェーギェルツェン (26b) には、『諦者品』(D.No.146, Pa, 『大薩遮尼乾子所説經』(『大正蔵』9, No.272 p.344a) を引用。

53) cf. 『瑜伽師地論』「本地分」(『大正蔵』30, p.359b)

54) 法尊には「遠離 (聞者) 身毛豎立等言語過失」といって聞き手に関することとしているが、根拠は未詳。

55) 音声の五支分については『瑜伽師地論』(『大正蔵』30, p.359b) には「鄙陋でないこと、輕易であること、雄朗であること、相応していること、義が善いこと」の五つとして、さらに説明されている。出典については竺仏念訳『長阿含經』内「闍尼沙經」、律藏 (cf. *Dul ba bzhi*) 等、六十支分については『莊嚴經論』、並びにその出所『秘密經』等を参照のこと (cf. 袴谷 p.207, Bhad.v4, 宝積部上 p.171, 中御門 [2006] pp.47-48)

さらにイエシェーギェルツェン (28b-29a) には、「これらの個々の確認を詳細に知りたいと欲するなら、大士世親が造られた『釈軌論』を詳細に見て知るべきである」などといって、ツォンカバの『讀・雲海』(東北 No.5275-33 Kha) の教証を示す。さらに如来の音声を聞いたことの功德として、『賢愚經』や『律阿含』を引用している。

56) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a4

のうち、頭部と四肢の五] 支分 (D.Ngi.61b6) と [指などの] 小支分が長時間にわたって見えても、かつて見えなかったように [それらを] 見る喜びによって、飽きない「容姿を見ることによって満足を知らないこと (飽き足らないこと)」という。

「[身業] 自らの本体の特徴」は、「身体は無比である (P.Ngi.77b1) こと」から知るべきである。かの世尊は、[三] 界と、[六] 趣 (D.Ngi.61b7) と、[胎生など四] 生処において、それぞれの教化すべき者たちに対して、顕色と行動を一致して示す<sup>57)</sup>、説法によって教化なされるから<sup>58)</sup>、「身体は無比である」という。

『聖仏随念経』<sup>59)</sup>に「諸々の欲 [界] によって染まらない。諸々の色 [界] によって染まらない。諸々の無色 [界] (D.Ngi.62a1) とまじわらない」というこの三句によって、かの世尊がどこに住するのかと、それにいかに執着しないで有情の利益をなされるかを示す。

そのうち、「どこに住して有情の利益をなされるのか」というなら、欲界と、色界 (D.Ngi.62a2) に住してである。そこには身 [業] と語 [業] の関係が有るからである。無色界においてはそうではない<sup>60)</sup>。それゆえに、「無色界とまじわらない」ということをお説きになった。

そのうち、かの世尊は欲界において有情の利益をなされるなら、欲 [界] に (D.Ngi.62a3) 属する食欲などや、または、そこに属する有情の [恩を仇で返すような] 諸々の誤った行いによって奪われないから、「諸々の欲 [界] によって染まらない」という。色界においてもまた、[等至に] 入定するとき、入定の諸々の安楽と、(D.Ngi.62a4) そこに属する有情と関係した、そこに生ずることの功德が正しく示されたので、心を投じていないから、「諸々の色 [界] によって染まらない」という。「染まらない」とは染まらないことである。それもまた、入定の味わいと、生ずるこ

57) cf. 『瑜伽師地論』「菩薩地」(大正30 p.492b-493c; 六明の一、神変通の個所で説明されている。また同「撰決摂分」菩薩地 (大正30 p.4746c) では、如来の調伏の方便の中で言及されている。

「染まらないこと」については、〈撰大乘論〉(長尾 [1987] pp.405-406) を参照。

また教化対象者に合わせた生を受けることについては、『瑜伽師地論』「菩薩地」大正30 p.563a を参照。

58) わが国では『妙法蓮華経』観世音普門品第二十五 (『大正蔵』9, No.262) のあり方が有名であるが、類似した内容で先行したものは、パーリの涅槃經にも伺えるようである。cf. 中村元 [1980] pp.75-77

59) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a4-5

60) 無色界では説法のための音声も存在しなくなるからである。また教化対象者の側からしても、色界、欲界が仏の教化を受けるにふさわしい場所であるが、天界はそもそも放逸に流れやすく「無暇」「難」に含められる。そして、欲界の南ジャムブ洲の人身こそが最もふさわしいとされている。cf. ツルティム、藤仲 [2005] pp.146-147

との功德 が正しく (D.Ngi.62a5) 見えることによって、味わうのである。それらがないから、「染まらない」という。

『聖仏随念経』<sup>61)</sup>に「諸蘊から脱している。諸界を具えていない。(P.Ngi.78a1) 諸処を制している。」

というこの三句によって、かの世尊はどんな〔有漏の〕事物にも執着しないで、有情の (D.Ngi.62a6) 利益をなさることを、示す。

その事物もまた、諸々の蘊と、界と、処〔である有漏の一切法〕である。外内の事物は、その本体であるからである。それらもまた〔凡夫たちにとっては〕執着の場所であるからである。

そのうち「諸蘊<sup>62)</sup>」は、あるいは生の自相 (定義) であるから、それらから<sup>63)</sup>離脱したことによって、(D.Ngi.62a7) かの世尊は「諸蘊から脱している」という。

「諸界<sup>64)</sup>」は、諸々の根 (感覚器官) によって識の門から、諸々の対境を具えた自体であるから、それに依った雑染を離れたから、かの世尊は「諸界を具えていない」(D.Ngi.62b1) という。

「諸処<sup>65)</sup>」は、見ることなどの生じる門となったから、それに依った雑染を制するから、かの世尊は「諸処を制した」という。

『聖仏随念経』<sup>66)</sup>に「諸々の結 (Skt. grantha, Tib. mdud ba) を断った。熱惱 (Skt. paridāha, Tib. yongs su gdung ba) から解脱 (D.Ngi.62b2) した。渴愛<sup>67)</sup>から

61) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a5

62) 蘊, 界, 処の語釈はアビダルマにおける標準的なものである。蘊の語釈は〈俱舍論〉I 20 と同釈を参照。〈決定義経註〉にも「蘊」は集まりの意味であり、それは経典に説かれているという。cf 本庄 [1989] p.49; 『大乘阿毘達磨集論』(『大正蔵』31, No.1605 p.666c) 『同雜集論』(『大正蔵』31, No.1606 p.704b-c)

63) デルゲ版 la であるが、北京版 las を採る。

64) 〈俱舍論〉隨眠品 ad v.34 以下を参照。〈決定義経註〉には「界」は種族の意味であり、たとえば山に金銀など多くの「種族」がある場合、「界 (鉤脈)」と呼ばれる。同様に一つの相續や依処における十八の「種族」が、十八界と呼ばれるし、眼なども心・心所の生起の原因であるから、界 (鉤脈) と呼ばれる、という。cf 本庄 [1989] p.52

65) 〈決定義経註〉には、「処」は心・心所の到来の門という意味であり、心・心所の到来 āya su nawa 生起を拡大すること√ tan から、処 āyatana と語源解釈されることを述べている。本庄良文 [1989] p.53, イェシエーギェルツェン (32a2-3) に、「処は、眼と色など、見と聞など心と心所が生ずるし、」などといって「見聞覚知」の四言説にも言及しているようであるが、根拠は不明。

66) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a5

67) イェシエーギェルツェン (33b4-5) には、「現在の『[三] 宝随念』の版本には、「有 (srid pa) より解脱した」と出ているようなら、上に説明したそれより説明の仕方を他にすることが必要であると思われる。」というから、「渴愛 sred pa」とは異なった版 (おそらくは法尊が別行の流布本と称しているもの) があったと思われる。世親の註釈によると、経典の本来の形としては「渴愛 sred pa」とあったということになる。

解脱した。暴流を渡った。」

というこの四句によって、かの世尊の断除の円満がどんなものであるならば、有情の利益をなさるのかを示す<sup>68)</sup>。

<sup>69)</sup> 諸々の煩惱は要約すれば、対境と出会わないもの (D.Ngi.62b3) と、出会うものの区別によって二種類 [である]。[すなわち、] <sup>70)</sup> 「結」の諸定義と、「熱悩」の諸定義である。それらの門もまた二種類 [である]。[すなわち] <sup>71)</sup> 渴愛の諸門と、<sup>72)</sup> 暴流の諸門である。

「対境と出会わない諸々のもの」については、希求する形相の (D.Ngi.62b4) 渴愛 (P.Ngi.78b1) の門から、諸々の結びついたものである。

「[対境と] 出会う諸々のもの」については、大の分として行ずる門から、暴流のように奪われる [・運びさられる] から、諸々の熱悩となるものである。

それぞれの「結」の門となった「諸々の渴愛」と、それぞれの「熱悩」の門となった「諸々の暴流」(D.Ngi.62b5) を断じたから、かの世尊は「諸々の結を断った。悩熱から解脱した。渴愛から解脱した。暴流を渡った」という。

[[『聖仏随念経』<sup>73)</sup> に]「智慧が完成した。過去、未来、現在の諸仏世尊の

68) イェシエーギェルツェン (32a6-b1) に、「『善逝』という個所に世尊が断除の円満を得たさまを説いた— その広釈のようなものとして、断除されるべきものをどのように断除したかの仕方を示すのである。」という。

69) イェシエーギェルツェン (32b4-5) に、「お言葉これらについて、軌範師マンジュシュリーキールティが[[『三昧王経の註釈]] 説明した他の仕方が現れているけれども、ここにおいては第二の一切智者 [である] 世親の意趣のように説明しよう。」といい、一般的に輪廻に繋縛するものには、業と煩惱二つが有るが、煩惱が重要であることなどを示している。

さらに、イェシエーギェルツェン (33b-34a) には、「輪廻が成立する因 [である] 業・煩惱二つと、その内でも煩惱が中心であり、煩惱すべての根本は我執であるさまと、我執を断除したなら煩惱すべてを止めるさまと、我執を止めるには無我の住し方を知ることが必要であるし、それを数習したなら、解脱を得るさまなど、要するに、輪廻に流転する仕方と、それより還滅、すなわち解脱を得る仕方について、教ほどこ場合に取らえるのではなく、正理の道より導いて、徹底した決定を得ることが必要である。それもまた、自己の相続を調伏する方便として運ぶのを知ることが、きわめて重要である。」などと「菩提道次第」や法称〈量評釈〉第2章と共通する考えを示す。そして、仏教との出合いをムダにしないで、自己の相続を調伏する最上の口訣として運ぶのを知ることが要義である、と述べている。

70) これら煩惱の差別については『瑜伽師地論』『本地分』(『大正蔵』30, p.314b-c) を参照。

71) イェシエーギェルツェン (33a-b) には、渴愛が後有の因であることを説いて、渴愛を欲の渴愛 (欲愛)、減の渴愛 (無有愛)、有の渴愛 (有愛) の三つとし、〈量評釈〉PV II 「量の成立」vv.274ab, 184cd-186 などを引用する。

72) 通常は「欲流」「有流」「見流」「無明流」の四つが挙げられる。cf. 『瑜伽師地論』『本地分』(『大正蔵』30, p.375b-376a)、あるいは六根について六の暴流という場合もある。同「本地分」(『大正蔵』30, p.373a)、イェシエーギェルツェン (33b1-4) は、玄奘訳『大乘阿毘達磨集論』(『大正蔵』31, No.1605, p.677b-678a; cf.No.1606, p.724b-725a) によって四結と三熱悩と四暴流を説明している。四結は貪心、害心、戒禁取見、見取、三熱悩は貪、瞋、癡、四暴流は欲、有、見、無明とされている。

73) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a5-6

(D.Ngi.62b6) 智慧に住する。涅槃に住しない。真實際 (Skt. bhūtakoti, Tib. yang dag pa nyid kyi mtha') に住する。」

というこの四句によって、かの世尊の智慧の円満がどんなものであるならば、有情の利益をなさるかを示す<sup>74)</sup>。その智慧は三種類<sup>75)</sup> [である]。[すなわち、]

一切相智と、無差別智 (D.Ngi.62b7) と、無住処智である。

そのうち、<sup>76)</sup>「一切相智」は、智慧によって所知のあらゆる集まりと、あらゆる形相を満たしているから、『聖仏随念經』に「智慧が完成した」というのである。

「<sup>77)</sup>無差別智」は、三世に属する仏の寿命と、(D.Ngi.63a1) 身体の自体と、国土などの特徴によって異なった「諸々の」ものも、法身によって平等性を得たから、『聖仏随念經』に「過去と未来と現在の諸仏世尊の智慧に住する」というのである。

「無住処 (D.Ngi.63a2) 智」は、[智により] 輪廻と [悲により] 涅槃に住さない (P.Ngi.79a1) から、涅槃 [の極端] に住さないのである。『聖仏随念經』に「真實際に住する」<sup>78)</sup> ことそれは、この声聞などの涅槃には住さないのである。「真實際」

74) イエシエーギエルツェン (34b) に、「これらにより、世尊が証得の円満を得たさまそれを広積したのである。」という。

75) これら三つの智慧は、〈撰大乘論〉に、声聞の智と菩薩の智の違いについて五種類に説明されているうち、第一から第三とその規定に類似した記述がある、もちろん程度の差は大きい<sup>8)</sup>。cf. 長尾 [1987] pp.290-293

76) cf. 〈撰大乘論〉長尾 [1987] p.378

イエシエーギエルツェン (35a1-6) には、「そのうち一切相智は、四念住、四正断、四神足、五根、五力、七覺支、八支聖道 [という] 三十七菩提分。四無量、八解脱、九次第定、十遍处、八勝处。無煩惱の等持、誓願智、六神通、四無礙解、[所依・所縁・心・智の] 一切相の四清浄、十自在、十力、四無畏、三不護、三念住、無忘失 [という] 仏十八不共法、[一切智、道相智、一切相智の] 三つの智をともなった証得の功德百四十六すべてがますます増長して、円満な完成が究竟し、色から一切相智までの一切法を現前に知るのである。広汎には〈般若波羅蜜經〉に説明しているようにです。まとめると、如実智と、如量智との二つである。」などと、〈現觀莊嚴論〉Ⅷ 2-6 により説明している。これらは般若学に基づくものであるが、『瑜伽師地論』『菩薩地』菩提品 (『大正藏』30, p.499a) にも関連した記述がある。

77) cf. 〈撰大乘論〉長尾 [1987] p.450、〈莊嚴經論』『菩提品』MSA. IX 61; D.No.4020, Phi.11a7-b1; Levi [1907] p.45; 和訳・宇井 [1979] p.166、袴谷、荒井 [1993] p.146; に関する安慧の『復註』(D.No.4034, Mi.136, 和訳・西藏文典研究会 [1981] p.83) には、法身以外の差別について、眷属は無尽意菩薩、觀自在菩薩、普賢菩薩など各々であり、仏国土の色も各々であり、仏の名も毘盧遮那、無量光、普賢など各々であり、身体の色や大きさも各々であり、法の受用は〈十地經〉〈入楞伽經〉〈般若波羅蜜經〉などを各々に説くからとされている。

他方、〈莊嚴經論』『菩提品』IX 65 には、法身は所依と意樂と事業により平等であるとされており、同じことが〈撰大乘論〉にも継承されている。cf. 西藏文典研究会 [1981] p.85; 長尾 [1987] p.350, p.378

また〈俱舍論〉智品Ⅶ 34 には、諸仏は資糧と法身と衆生利益により平等であり、寿命と種姓と量などにより平等でないといわれている。cf. 櫻部、小谷、本庄 [2004] p.140

78) イエシエーギエルツェン (35b-36a) には、実際に住するといっても、声聞のように寂靜界での等至に入ったのではないのではないことを注意し、さらに、空・寂靜・無生の理趣

は、(D.Ngi.63a3) 清浄な真如<sup>79)</sup>(de bzhin nyid) であり、それこそが法身である。それに住することを「真實際に住する」という。

『聖仏随念経』<sup>80)</sup>に「一切の有情を御覧になる地に住しておられる。」

ということが、ここに〔内容をまとめた〕撰義これである。

「一切有情を御覧になる地」<sup>81)</sup>は、(D.Ngi.63a4) 如来の三身 (sku gsum) である。すなわち、かの如来はまさしくそれに住している。一切の有情の相続を見てから、〔彼ら教化対象者の〕思惟 (意樂) のとおりに三乗の門から説法なさるので、三身まさにそれこそに住される、という意味である。

すなわち (D.Ngi.63a5) 教証 (lung)<sup>82)</sup>に、

「かの世尊は受用身によって、十地に住する聖者観自在と、彼以外の諸々の大士に大乘の法を説きつつ、色究竟天 (’og min) の住処に住しておられる」

と出ている。そのように、ひとまず、(D.Ngi.63a6) 〔円満な〕受用身 (報身) によって、有情の利益をなさることに適用して説明した。

変化身 (化身) についてもまた、有情の利益をなさることに適用しうる。すなわち、教説 (gzhung lugs)<sup>83)</sup>には、

「かの世尊は変化身によって<sup>84)</sup>、欲〔界〕に行ずる聖者シャーリプトラなどと、彼 (D.Ngi.63a7) 以外の福分を具えた者たちである有情の相続を御覧になって、〔彼らに教授するために〕三神変<sup>85)</sup>を (P.Ngi.79b1) 示したことによって、〔教化対象者の〕思惟のとおりと、福分のとおりとに声聞乗の法こそを示すし、輪廻のあるかぎりに住し

については仏の意趣をナーガールジュナ父子が註釈した正理の道から、それも伝統ある学者の口訣によって聞・思・修して知るべきであるといつて、中観の考えに従うよう勧めている。

79) イエシエーギェルツェン (35b) に、「一切法の住し方を、戯論の八辺を離れた、自性により清浄である上に、偶然の垢すべてについて遠離した、二つの清浄をそなえた法身において」などという。真如は本来清浄であるのを、煩惱障、所知障により汚染されて有垢の真如となっているが、それら垢すべてを除去した無垢の真如が、自性身ないし法身とされるのである。

80) D.mDo-sde, No.279, Ya.55a6-7

81) イエシエーギェルツェン (36b-37a) には、三身説を確認した上で、自利の法身を自性身と智慧法身の二つに分けて、〈現観莊嚴論〉Ⅷのハリバドラ流の四身説を説明している。

82) 未確認。有頂天については田中 [1997] pp.28-30 を参照。

イエシエーギェルツェン (37a) には、般若学に従って、受用身は「身決定」「眷属決定」「処決定」「法決定」「時決定」の五決定を有するものとして説明している。cf. 兵藤 [2000] p.171, 田中 [1997] p.34

83) 未確認。イエシエーギェルツェン (37a-b) には、変化身は技芸の変化身、生の変化身、最勝の変化身の三つとして説明している。cf. 兵藤 [2000] p.171, 188 note112

84) D.sprul pa'i sku di などとなっている。P.sprul pa'i skus を採る。

85) cf. 『瑜伽師地論』『声聞地』(『大正藏』30, p.435c, 496b), *Mahāvīyūtpatti*, 232-234, 西尾 [1982] p.255 神境、記説、教誡の三つである。

ておられる」

と出ている。そのようにかの変化身も、それ（有情の利益）を具えていることを示した（D.Ngi.63b1）のである。

かの法身は〔後の〕二つの〔受用身と変化身との〕基盤となった<sup>86)</sup>から、それら〔二身〕の因となるので、それこそが主要な因である。それがなければ、その二つもないので、有情の利益をなさることもないであろう。それゆえに、「一切の有情を御覧になる地」は「如来の三身（D.Ngi.63b2）である」といわれるものに住している。「これらが如来の正しい功德である」<sup>87)</sup>。

ここに「意味をまとめた」まとめの偈頌は、

相続が断絶しない色・心を有する。そのなすべきことは道理である。界と事物に執着しない。断除と智慧が円満（D.Ngi.63b3）である。

他者のために行ずる— これは、二〔句〕と六〔句〕と三〔句〕と四〔句〕、六〔句〕と三〔句〕、二〔句〕、四〔句〕の二組、これらの句によって説示した。

六の形相によって身体を示した。根本の〔因〕、顕示の因と、自性〔の円満〕、状態〔の円満〕、事業の円満〔について〕の諸（D.Ngi.63b4）句によって、ここに説明した。

教主の円満それは因と、同じく出現なさったことと、彼のかの事業それが住している。〔本著はそれに関して〕少しばかりの念〔について〕のまとめたものである、

ということである。

『聖仏随念広註』。軌範師世親の御作が終了した。

<sup>88)</sup> インドの親教師ダーナシーラと主任翻訳師、比丘ベルツェク・ラクシタが翻訳し、校訂して決めた。

付録：イエシエーギャルツェン著『三宝の功德を随念する仕方の釈論・牟尼の教えの明らかな灯火 *dKon mchog gsum gyi yon tan rjes su dran pa'i tshul rnam par bshad pa Thub bstan*

86) 法身は他の二身の基盤になることについては〈撰大乘論〉長尾〔1987〕pp.340-344を参照。

87) これは文字どおりではないが、『聖仏随念経』の最後の文章 D.No.279, Ya.55a7 に一致すると思われる。これにより同経は終了する。すなわち次のとおりである。

'di dag ni de bzhin gshegs pa'i ye shes yang dag pa'i che ba'i yon tan no/ /Phags pa Sangs rgyas rjes su dran pa rdzogs so/ /

「これらが如来の智慧の真実の大なる功德である。『聖仏随念経』は終了した。」

88) これはチベット語訳における奥書きである。



*gsal ba'i sgron med*』東北 No.6093 Ba 1-61の科文

0.1 (帰敬偈) 1b1

0.2 (著作の目的) 2b1

0.3 (最高のものを求める者たちの〔済度される〕渡し場は仏世尊のみであること)  
2b3

1. 教える入る勝れた門 — 帰依する方法 4a4

1.1 何に依って帰依するか因 4a5

1.2 それに依って帰依する対境 5a6

1.3 どれほどで帰依したのかのあり方 6b1

1.3.1 功德を知ることにより帰依したこと 6b2

1.3.2 特徴〔・差別〕を知ることにより帰依したこと 6b3

1.3.2.0 三宝個々の功德を念ずる仕方 7a1

1.3.2.1 三宝を確認する 7a2

1.3.2.1.1 声聞部の宗の三宝を確認する仕方 7a3

1.3.2.1.2 大乘の宗の三宝を確認する仕方 7a4

1.3.2.2 三宝個々の功德を念ずる仕方 8a4

1.3.2.2.1 仏の功德を随念する仕方 8a5

1.3.2.2.1.1 共通の功德を随念する仕方を略説する 8a6

1.3.2.2.1.2 非共通の因と果を通じて功德を随念する仕方を個々に分けて、説明する  
14a4

〔「福德の等流、善根をムダにしないこと」について〕 14b5

〔「忍により莊嚴されたこと」について〕 16a4

〔「随好により飾られたこと」について〕 17b6

〔「諸相の花が開いたこと」について〕 17b6

〔「行境に順応すること」について〕 22b3

〔「見ると合わないことがないこと」について〕 22b3

〔「信により勝解するもの」について〕 22b4

〔「一切有情の教主」について〕 24b1

〔「諸菩薩の父」について〕 24b6

〔「聖人たちの王」について〕 25a1

〔「涅槃の都に行く者たちの船主」について〕 25a5

〔利益の方便としての事業〕 25b6

## 1.3.2.2.1.2.1 意の事業 25b6

〔「智慧は無量」について〕 25b6

## 1.3.2.2.1.2.2 語の事業 26b2

〔「弁才は不可思議」について〕 26b2

〔「言葉は浄らかである」について〕 27a2

## 1.3.2.2.1.2.3 身の事業 29a6

〔「容姿を見ることにより飽きない」について〕 29b1

〔「身は等しいものが無い」について〕 29b2

〔「欲〔界〕により染まらないのと、色〔界〕により染まらないのと、無色〔界〕と混ざっていない」について〕 30b2

〔「苦より解脱した」などについて〕 31b3

〔「諸々の結を断じた」などについて〕 32a5

〔「智慧が円満に完成した」などについて〕 34b4

## 1.3.2.2.1.3 意味をまとめて説く 36b1

〔「有情すべてを見る地に住しておられる」などについて〕 36b2

〔仏随念とカダム派祖師の語録〕 38a4

〔仏の功德すべては説明不可能であること〕 39b6

〔仏功德を述べたことの意義〕 42a2

## 1.3.2.2.2 法の功德を随念する仕方 42b4

## 1.3.2.2.2.1 法を確認する 42b4

## 1.3.2.2.2.2 それの功德を念ずる仕方 45b5

## 1.3.2.2.3 僧伽の功德を随念する仕方 50a3

## 1.3.2.2.3.1 僧伽を確認する 50a4

## 1.3.2.2.3.2 それの功德を念ずる仕方 51b2

〔共通の乗に関するもの〕 51b2

〔非共通の大乗の僧伽に関するもの〕 55b2

## 1.3.3 承認したことにより帰依したこと 58b3

## 1.3.4 他に語らないことにより帰依したこと 58b4

## 1.4 帰依してから学ぶべきことの次第 58b6

## 〔参考文献〕

石上和敬

- ・「一音説法の諸相（部派史料編）」（『印度学仏教学研究』48-2, 2000年）
- ・「一音説法の諸相（大乘仏典編）」（『江島恵教博士追悼論集 空と実在』, 春秋社, 2000年）
- ・「一音説法の展開」（『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』17 所収, 2000年）

石川美恵訳注

- ・『二卷本訳語釈 一和訳と注解一』, 東洋文庫, 1993年

宇井伯寿

- ・『大乘莊嚴經論』, 岩波書店, 1979年

岡田行弘

- ・「三十二大人相の成立（Ⅰ）」（『印度学仏教学研究』38-1, 1989年）
- ・a「三十二大人相の成立（Ⅱ）」（『印度学仏教学研究』40-1, 1991年）
- ・b「八十種好」（『前田専学博士還暦記念論集 〈我〉の思想』, 春秋社, 1991年）
- ・「三十二大人相の成立（Ⅲ）＜賢劫経＞の三十二大人相」（『印度学仏教学研究』41-1, 1992年）
- ・「三十二大人相の成立」（『勝呂信静博士古稀記念論文集』, 山喜房仏書林, 1996年）

小川一乗

- ・『新国訳大蔵経, 央掘摩羅経, 勝鬘経他』（大蔵出版, 2001年）
- ・『小川一乗仏教思想論集 第一巻 仏性思想論Ⅰ』（法蔵館 2004, 同『仏性思想』（文栄堂 1982年）の再録）

荻原雲来

- ・『和訳 称友俱舎論疏（一）』, 梵文俱舎論疏刊行会, 1933年

香川孝雄

- ・『無量寿経の諸本対照研究』, 永田文昌堂, 1984年
- ・『浄土教の成立史的研究』, 山喜房仏書林, 1993年

梶山雄一, 瓜生津隆真

- ・『龍樹論集』（「大乘仏典」14）, 中央公論社, 1991年

勝部隆敏

- ・「説法と四無礙解」（『大正大学総合仏教研究所年報』1, 1979年）

木村俊彦

- ・『ダルマキールティ宗教哲学の研究 増補版』木耳社, 1987年

合田秀行

- ・「無著における Buddhānusmṛti について」（『印度学仏教学研究』44-1, 1995年）

- ・「無著における Saṅgānusmṛti について」(『精神科学』36, 1997)
- ・「無著における Dharmānusmṛti について」(『印度学仏教学研究』46-2, 1998)

西藏文典研究会

- ・『西藏文献による仏教思想研究 一安慧造『大乘莊嚴經論注疏』一菩提品 (I) 一』1, 1981年

榊亮三郎編

- ・『梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集』, 国書刊行会, 1981年

櫻部建

- ・「念仏と三昧」(『奥田慈應先生喜寿記念 仏教思想論集』, 春秋社, 1976年)
- ・『俱舍論』(『仏典講座』18), 大蔵出版, 1981年

櫻部建, 小谷信千代

- ・『俱舍論の原典解明 一賢聖品一』, 法蔵館, 1999年

高崎直道

- ・『宝性論』, 講談社, 1989年

武邑尚邦

- ・『仏教論理学の研究』, 百華苑, 1968年

田中公明

- ・『性と死の密教』, 春秋社, 1997年

塚本啓祥, 松永有慶, 磯田熙文編

- ・『梵語仏典の研究 Ⅲ論書篇』, 平楽寺書店, 1990年

ツルティム・ケサン

- ・「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第2章「量の成立」章試訳 (1)」(『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』23, 2006年)

ツルティム・ケサン, 藤仲孝司

- ・『中観哲学の研究』V, 文栄堂, 2002年
- ・『悟りへの階梯』, UNIO, 2005年
- ・『ツォンカバ 菩提道次第大論の研究』文栄堂, 2005年
- ・『解脱の宝飾』, UNIO, 2007年
- ・「チベット語訳『宝徳蔵般若経』の和訳研究 一クンタン・コンチョック・テンペードンメの註釈とともに一」(『法談』, 2007年)

長尾雅人

- ・『撰大乘論 和訳と注解』(上), 講談社, 1982年

・『撰大乘論 和訳と注解』（下）講談社，1987年

長尾雅人，櫻部建

・『宝積部經典』（「大乘仏典」9），中央公論社，1974年

中御門敬教

・「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究（1）—陳那，釈友，智軍の〈普賢行願讃〉理解 七支供養の章（1-7章）—」（『浄土宗学研究』32，2006年）

中村瑞隆

・『梵漢対照究竟一乗宝性論研究』，山喜房仏書林，1961年

中村元

・『ブッダ最後の旅』，岩波文庫，1980年

・『ゴータマ・ブッダ I』（「中村元著作集〔決定版〕11」），春秋社，1992年

西尾京雄

・『仏地経論之研究』，国書刊行会，1982年

袴谷憲昭，荒井裕明

・『大乘莊嚴経論』（「新国訳大蔵経」瑜伽・唯識部12），大蔵出版，1993年

兵藤一夫

・『般若経釈 現観莊嚴論の研究』，文栄堂，2000年

平川彰

・『原始仏教とアビダルマ仏教』（「平川彰著作集」2），春秋社，1991年

藤田宏達

・「仏の称号 一十号論」（『玉城康四郎博士還暦記念論集 仏の研究』，春秋社，1977年）

本庄良文

・『梵文和訳 決定義経・註』，1989年

・「『俱舎論』七十五法定義集」（『三康文化研究所年報』26・27，1995年）

法尊

・「随念三宝経浅説」（『大蔵経補編』7，1985年）

松田和信

・「Vasubandhu における三帰依の規定とその応用」（『仏教学セミナー』39，1984年）

望月海慧

・「ディーパンカラジュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳（5）」（『身延論叢』7，2002年）

矢板秀臣

・「『声聞地』『根律儀』節における分別 (vikalpa) について」(『成田山仏教研究所紀要』26, 2003年)

山口益

・『世親の浄土論』, 法蔵館, 1962年

・「世親の釈軌論について 一かりそめな解題というほどのもの一」(『山口益仏教学文集』下, 春秋社, 1973年)

吉崎一美

・「『聖仏随念』(P.3964) の諸問題 一 Sādhana-mālā に関して一」(『印度学仏教学研究』28-2, 1980年)

Bunyu NANJIO

・ *The Laṅkāvatāra Sūtra*, Kyoto, 1923

Edward Conze

・ *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, Roma (Serie Orientale Roma XIII), 1974

HATTORI M

・ *Dignāga on Perception*, Harvard Oriental Series 47, Cambridge, Mass. 1968

Jens. Braarvig

・ *Akṣyamatinirdeśasūtra*, Oslo, 1993

Lokesh Chandra

・ *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 臨川書店, 1990

Louis de la Vallée Poussin

・ *Madhyamakāvatāra*, 名著普及会, 1977

N.H.Samtani

・ *Arthaviniścaya-Sūtra & Its Commentary (Nibandhana)*, Patna, 1971

・ *Gathering the Meanings Essential Teachings of the Buddha*, Dharma Publishing, 2002

Sylvain Lévi,

・ *Mahāyāna-Sūtrālamkāra*, Paris, 1907

Unrai WOGIHARA

・ *Bodhisattvabhūmi*, Tokyo, 1971

(付記 本庄良文氏より関連文献の御提供, 並びに御教示を頂いた。ここに謝意を表します)